

(擬似)分裂文の生成

武田 和 恵

1. はじめに

(1)にあげた文は英語の分裂文(cleft sentence)と擬似分裂文(pseudo-cleft sentence)であり、どちらも繫辞(copula)のbeの後に来る要素を焦点化(focalize)する構文である。

- (1) a. It is Mary that John met yesterday.
b. What Mary is looking for is a pet.

英語の(擬似)分裂文に関する先行研究では、非焦点要素であり前提部分を表す(2)の[_a]部分において焦点要素に対応する空所の分布が移動に関する制約に従うことから、(擬似)分裂文形成が、(2)で示したように、疑問文形成や関係節形成と同様にwh要素もしくは空演算子(OP)の移動過程を含むと考えることが提案されている(cf. Chomsky 1977)。

- (2) a. It is XP [_a OP that ... e ...]
b. [_a What ... e ...] is XP

焦点要素に関しては以下で見ると基底生成される分析と削除(もしくは移動)の操作が適用され派生する分析が考えられる。

ここで(1)に対応する日本語の構文を搜してみると、Hoji(1990)が指摘しているように(3)が考えられる。

- (3) a. [_a ジョンが昨日会ったの] はメアリー(に)だ
b. [_a メアリーが捜しているの] はペット(を)だ

(3)では、繫辞の「だ」の前の焦点要素が格助詞や後置詞を伴う場合と伴わない場合があるが、本論文ではどちらも日本語における焦点化の機能を持つ(擬似)分裂文として考察の対象とする。

英語における(擬似)分裂文の生成過程を踏まえた上で、[_a]で示した部分の形成に大きく関与していると思われる関係節形成が日本語においては移動を含まない可能性があることを考慮すると、日本語の(擬似)分裂文形成の過程は、(4)に示した4つの型のうち、(4a)(4b)であるよりも、(4c)(4d)のいずれかである可能性を検討する必要がある。

- (4) 非焦点(前提) 焦点
[_a ... -no]-wa XP-(Case Particle/Postposition)-da
- a. OP移動含む : 基底生成
 - b. OP移動含む : 削除により派生
 - c. OP移動含まない: 基底生成
 - d. OP移動含まない: 削除により派生

以下の議論では、日本語の(擬似)分裂文において、焦点要素が格助詞や後置詞を伴わずに繫辞の前に生ずる場合は(4c)の型に対応し、焦点要素が格助詞や後置詞を伴って生ずる場合は(4d)の型に対応する可能性が強いことを示す。

節の構成は次のとおりである。第2節では英語の(擬似)分裂文が(4a)の型に対応することを確認する。第3節では日本語の(擬似)分裂文は焦点要素が格助詞／後置詞を伴う場合は英語と同様(4a)の派生過程を持ち、格助詞／後置詞を伴わない場合は(4c)の派生過程を持つとする Hoji

(1990), Hoji & Ueyama (1998)の議論を検討する。第4節では焦点要素が格助詞／後置詞を伴う場合は(4d)の派生過程を経ると考える可能性を示唆する。第5節では本論文での議論をまとめる。

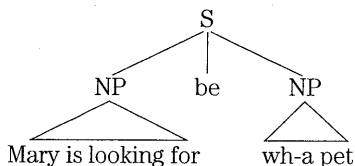
2. 英語の(擬似)分裂文の派生過程

英語の(擬似)分裂文に関して、繫辞の後に生じ得る要素の範疇は分裂文と擬似分裂文とで違いがあるが、どちらの構文においても顕著なのは、(1)で繫辞によって切り離されている要素がもともとの位置に生じているような平叙文(declarative sentence)が、(5)で示したように存在することである。

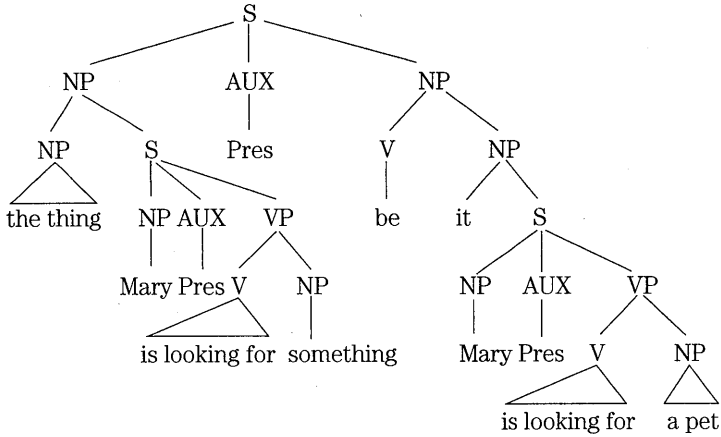
- (1) a. It is Mary [_a that John met yesterday]
b. [_a What Mary is looking for] is a pet
- (5) a. John met Mary yesterday.
b. Mary is looking for a pet.

このような並行性から、先行研究においては(1)がその生成の過程において(5)と類似の構造を含むことを想定する分析が提案されている。そのうち、擬似分裂文に関する抜き出し分析と削除分析をHalvorsen (1978)から引用したものが(6)と(7)である。¹

- (6) 抜き出し分析 (Akmajian 1970, Pinkam and Hankamer 1975)



(7) 削除分析 (Peters and Back 1971)



(6)では主語位置にある(1b)の[]に対応する部分に含まれる焦点となる要素が変形操作によって抜き出され、繫辞の後の空の位置に移動する。(7)では繫辞の後に主語位置にある構造と並行的な構造が置かれ、焦点要素以外の要素が主語位置の対応する要素との同一性の下に削除を受ける。これらの抜き出しや削除の操作を妥当かつ必要とすることを支持する証拠の一つに再帰代名詞に関する連結性(connectivity)あるいは再構築性(reconstruction)の現象がある。

(8)において非焦点部分に含まれる名詞と同一指示の再帰代名詞が焦点の位置に生じ得ることは、再帰代名詞の認可条件の点で説明を必要とする。

- (8) a. What Bill_i did was build a house for himself_i/*him_i
 b. It was for himself_i/*him_i that Bill_i built a house
 (9) Bill_i built a house for himself_i/*him_i

(8)の例が何の操作の適用も受けずに基底生成されたものだとすると、ある局所的領域内に先行詞を必要とする再帰代名詞の解釈が可能であることが説明されえない。(9)に類似する基底構造を(8)が持ち、それに抜き出しや同一性の下の削除が適用されると想定することではじめて、(8)において非焦点部分に含まれる名詞と同一指示の再帰代名詞が焦点の位置に生じ得ることが、無理なく説明できるのである。

しかし、1970年代に提案された(6)や(7)の分析を現在そのままの形で受け入れることには無理がある。まず(6)の抜き出し分析に関しては、これを一種の移動と考えた場合、可能な移動と移動先が厳しく制限されている現在の枠組みでは、基底において主語位置の要素の一部として生じている要素を繫辞の後ろに移動させるような、つまり移動要素の着地位置が元の位置をc統御(c-command)するような通常の上方移動(upward)ではない、側方への移動(sideward movement)を想定することは許されない。(7)の削除分析に関しても、一般に削除が適用される環境では、同一の解釈が可能な、削除が適用されない表現も許容される。つまり削除の適用は随意的なわけである。ところが、(10)に見られるように、擬似分裂文では、焦点要素以外の要素(build)が繫辞の後に生ずることは許されない。

(10) *What Bill built was build a house for himself

このようなことを考慮すると、繫辞の後の焦点要素は表層の位置に基底生成されると考えることが妥当である。では、その場合、(8)のような再帰代名詞の分布はどう説明されるのか。ここでは、Hojiが指摘しているようにBarss (1984)の連鎖束縛(chain binding)の考え方を採用することで説明が可能になる。

- (11) a. [[What_j Bill_i did e_j] was [build a house for himself_i]_j]
 b. [It was [for himself_i]_j [OP_j that Bill_i built a house e_j]]

(擬似)分裂文は非焦点部分で表現されているものが繫辞の後ろの焦点要素と同一であることを指定(specify)する機能を持っている。そこで(11)で示したように、whatやOPと焦点要素が同一指標を持つと考えることに何の支障もないわけである。これによってwhat/OPと空所eで構成された連鎖(chain)は焦点要素も含む拡大された連鎖((11a)ならば([build a house for himself_i]_j, What_j, e_j)を形成し、(11b)ならば([for himself_i]_j, OP_j, e_j)を形成する)となる。再帰代名詞の先行詞Billはこの拡大された連鎖の一部を局所領域内でc統御(c-command)しているため、あたかも内部に含まれる再帰代名詞がその位置(e_jの位置)でc統御されたかのような解釈が可能となる。

ここまでは、(擬似)分裂文の焦点要素が基底生成されると考えることの妥当性を検討してきたが、次に、非焦点部分の構造をどう捉えるかについて考えてみる。(6)と(7)の分析では繫辞の後の焦点要素をどう導くかに関しての相違はあるが、主語位置に生ずる非焦点要素は主要部の無い関係節(headless relative/free relative)に類似した構造と捉えられている点は共通である。Chomsky (1977)は(12)の例を挙げて、分裂文の派生が、長距離依存関係を許すこと、複合名詞句制約、wh島制約に従うことを示し、疑問文形成、関係節形成、話題化と同様にwh要素の移動を含む過程であると分析している。²

- (12) a. It is this book [that I really like e]
 b. It is this book [that I asked Bill [to get his students to read e]]
 c. *It is this book [that I accept [the argument that John should read e]]
 d. *It is this book [that I wonder [who read e]] (Chomsky 1977)

(12b)では、焦点位置の this book は二重の節の内部の e で示された空所と結び付けられており、間に結びつきを阻止するような構造が存在しないため、節を越えた長距離依存関係が可能になっている。(12c)では、空所は複合名詞句の中に埋め込まれた位置にあり、空の演算子が一番高い位置にある埋め込み節の指定辞 (CP spec) の位置にまで移動するとすると、複合名詞句制約を破る構造となり、非文法文となる。(12d)では、空所が wh 句に埋め込まれた位置にあり、空の演算子の移動を想定すると、wh 島制約に抵触することになり、非文法文となる。

以上のことから、英語における(擬似)分裂文の形成においては、非焦点部分では wh 要素/空演算子(OP)の移動を含み、焦点要素は表層の位置に基底生成されると考えることが妥当であることが分かる。³ これは(4)の4つの型のうち(4a)に対応する型であることが確認できる。

3. 日本語における(擬似)分裂文

3.1. Hoji (1990)、Hoji & Ueyama (1998)の分析

Hoji (1990)では、(13)に示したように、繫辞の前の焦点位置に生起する要素が、格助詞や後置詞を伴う場合とそうでない場合を明確に区別し、前者は英語と同様に移動過程を含むが、後者は含まないと分析している。

(13) a. [_S no]-wa NP-CASE da⁴

b. [_S ... no]-wa NP da (Hoji 1990)

移動過程の有無を分ける根拠として示されているのは、(13a)のタイプの例が、(12)のパラダイムと同様の文法性を示し、所謂移動に関する島制約に従うのに対して、(13b)のタイプの例がその条件に従わないことである。(14)、(15)が問題となるデータである。

- (14) a. [_a ジョンが [_S メアリーが昨日 e その書類を見せたと]思っているの]は[あのCIAエージェントに]だ
b. *? [_a ジョンが [_{NP} [_S e e 会ったことがある]日本人]を大勢知っているの]は[ラッセルに]だ (前掲論文より)
- (15) a. [_a ジョンが [_S メアリーが昨日 e その書類を見せたと]思っているの]は[あのCIAエージェント]だ
b. [_a 会社が [_{NP} [_S e e メアリーにみせた]男]をくびにしたの]は[その書類]だ
c. [_a ジョンが [_{NP} [_S e e 会ったことがある]日本人]を大勢知っているの]は[ラッセル]だ (前掲論文より)

(14a)と(15a)はともに繫辞前の焦点位置の要素が埋め込まれた節の間接目的語に対応する空所と結び付けられて解釈され、長距離依存関係が成立することを示している。空所が複合名詞句の中にさらに埋め込まれている場合は、焦点位置の要素が格助詞/後置詞を伴う場合には(14b)のように非文法文になり、伴わない場合には(15b, c)のように文法文となることがわかる。

(14b)の非文法性はその派生過程が空の演算子の移動を含むと分析すると、複合名詞句制約違反によって排除されるとの説明ができる。(15b)の文法性に関しては、焦点位置の要素が格助詞/後置詞を伴わない(擬似)分裂文は、単に(16)と並行的な構造を持ち、Hoji (1990)が指摘するように、助詞の「は」がとっている要素は「の」を主要部とする関係節と類似の構造を持つと考えれば、(15)が移動に関する島制約に従わないことは、Kuno (1973)等が指摘した日本語の関係節形成が移動に関する島制約に従わないことに還元できる。

(16) NP-wa NP-da

ここで、Hoji (1990) および Hoji & Ueyama (1998)の分析をまとめると、格助詞/後置詞を伴う(擬似)分裂文は移動過程を含むのに対して、それらを伴わない(擬似)分裂文では、非焦点部分が代名詞的な「の」を主要部とする関係節と類似の構造を持ち、移動過程を含まない。焦点の位置に生ずる要素の生成過程に関しては特に論じられていないが、基底生成されると思われる。

3.2. (擬似) 分裂文の持つ基本的意味

焦点要素が格助詞/後置詞を伴う場合とそうでない場合の派生過程についてさらに検討する前に、(擬似)分裂文の持つ基本的な意味特性について考えてみる。英語において指摘されているのは、ある(擬似)分裂文が真であるか偽であるかを決定するような真理条件は、対応する平叙文の真理条件と同じであり、(擬似)分裂文と平叙文とで異なるのは、規範的含意(conventional implicature)の、焦点要素の存在に関する含意(existential implicature)と網羅的であることに関する含意(exhaustiveness implicature)である、ということである。(Halvorsen 1978)。

まず、存在に関する含意であるが、

(17) Mary kissed John.

(18) It was John that Mary kissed.

(19) Mary kissed somebody.

Halvorsen は、(18)の文は(19)のように焦点要素を不特定のものに置き換えた文を含意するとし、さらに(20b)を主張する話者は(20a)も同様の

主張とみなすが、(21)に関しては、そのようにみなさないと述べている。これは(18)において(19)のメアリーがキスした誰かが存在するというのが前提とされており、主張されている情報ではないことを意味している。

- (20) a. I just discovered that Mary kissed John.
b. I just discovered that it was John that Mary kissed.
(21) I just discovered that Mary kissed somebody.

これに関連して、(19)の含意は(18)を(20)のように疑問化しようと否定しようと影響を受けない。これは(17)を疑問化したり否定した場合に(19)を全く含意しないことと対照的である。

- (22) a. Was it John that Mary kissed?
b. It wasn't John that Mary kissed.

次に焦点位置の要素が非焦点部分で表された条件を満たすものを全て網羅しているという含意をみてみる。(18)の文は(17)と異なり、問題とされる範囲の中で条件を満たすのはジョンだけであるという(23)の含意を持つ。

- (23) John was the only person that Mary kissed.

さてここで日本語の(擬似)分裂文を検討してみると、英語と並行的な事実が確認できる。まず、(25)の(擬似)分裂文とそれに対応する(24)の平叙文の真理条件は同じである。しかし、(25)が格助詞/後置詞の有無に関わらず(26)のようにジョンが会った相手が存在することを規範的含

意として持つのに対して(24)はそうでない。

- (24) ジョンが昨日メアリーに会った
- (25) ジョンが昨日会ったのはメアリー(に)だ
- (26) ジョンが昨日だれかに会った

これは、(27b)を主張する話者が(27a)も同様に受け入れるのに対して、(28)は受け入れないことから証拠付けられる。ジョンが昨日会った相手が存在することは(27b)を発話するような話者にとっては前提とされることであり、新たに主張すべき情報に入らないわけである。

- (27) a. 私はたった今ジョンが昨日メアリーに会ったとわかった
- b. 私はたった今ジョンが昨日会ったのはメアリー(に)だとわかった
- (28) 私はたった今ジョンが昨日だれかに会ったとわかった

さらに(25)を疑問化したり、否定しても(26)の含意は影響を受けない。

- (29) a. ジョンが昨日会ったのはメアリー(に)ですか
- b. ジョンが昨日会ったのはメアリー(に)ではない

焦点要素が網羅的であることの含意も同様に観察される。(25)は、繫辞の前に生じている要素が条件を満たす要素を過不足なく網羅していること、つまり(30)を含意として持つ。

- (30) (今問題にしている人の中で)メアリーはジョンが昨日会った唯一の相手だ⁵

ここまで、焦点要素が格助詞/後置詞を伴う場合とそうでない場合どちらに関しても、規範的含意が観察されることをみてきたが、意味解釈に関して両者が異なる振る舞いをするのではないかという点に関して説明しておく。

英語においても日本語においても繫辞には、指定的な用法と叙述的な用法とがあり、名詞句が繫辞の後もしくは前に来る場合、それぞれ以下のような例がある。

- (31) a. That boy is John. (指定的)
b. John is a student. (叙述的)
cf. John is smart. (叙述的)
- (32) a. あの少年はジョンだ (指定的)
b. ジョンは学生だ (叙述的)
cf. ジョンは賢い (叙述的)

指定的な用法では、繫辞によって結び付けられる名詞句は主語が指し示すものがそれとわかるように指定・同定し、叙述的な用法では、主語の持つ特性を表す。

(擬似)分裂文でも繫辞にこの二つの用法がある。興味深いのは、英語では(33)のように焦点要素に複数の名詞句が生じる場合でも、指定的な用法と叙述的な用法は表面的な相違を示さないが、日本語ではその違いが明白になる点である。

(33) What Lisa is chasing is a venomous reptile and her favorite pet.

(Halvorsen 1978)

(33)の擬似分裂文は二通りの解釈が可能で、指定的な解釈ではリサが追

いかけたものは2匹の動物であるが、叙事的な解釈ではリサが追いかけたものは有毒な爬虫類という特性とお気に入りのペットであるという特性を併せ持つという意味になる。

対応する日本語の(擬似)分裂文を考えると、指定的用法では(34a)のように焦点位置の二つの名詞句を組み合わせるために助詞の「と」が用いられねばならないのに対し、叙事的用法では(34b)のように繫辞「だ」の連用形である「で」を用いて二つの名詞句をつなげなければならない。

- (34) a. [リサが追いかけているの]はトカゲとお気に入りのペット(を)だ
b. [リサが追いかけているの]はトカゲでお気に入りのペット(*を)だ

さらにここで注意する必要があるのは、焦点要素が格助詞/後置詞を伴う場合は指定的な解釈のみが可能で、叙事的な解釈はできないということ点である。これは名詞句が指示対象を表す用法と特性を表す用法の二重機能を同時に満たすことができないことを示している。格助詞/後置詞はそれが付加された要素が項であることを要求するのに対して、「で」は付加された要素が叙事的であることを要求する。(34b)はその二つの要求が同時に満たしえないために非文法文となるのである。

以上、この節では(擬似)分裂文の持つ基本的な意味についてその特性を観察したわけだが、日本語においても、存在や網羅性に関する規範的含意がみられること、指定的な解釈と叙事的な解釈の二通りが存在することなどを確認した。

3.3. 連結性を示す現象

(擬似)分裂文の生成過程に移動が含まれることを示唆するとされる例をさらに検討していく。移動現象の存在を示すためにしばしば用いられる連結性(connectivity)も、(13a)の格助詞/後置詞付きの焦点要素を含む場

合では(36)のように観察されるが、(13b)の場合では、後ほど(37)で見
るように観察されない。

(13) a. [_S no]-wa NP-CASE da⁴

b. [_S ... no]-wa NP da (Hoji 1990)

(35) [トヨタさえ]_iが[そこ_iを敵視している会社]を訴えた

(36) a. [_a [トヨタさえ]_iが e 訴えたの]は [そこ_iを敵視している会社
を]_d

b. [_a e [そこ_iを敵視している会社]を訴えたの]は [[トヨタさえ]_i
が]_d (Hoji & Ueyama 1998)

ここで基本となるのは、(35)のような(擬似)分裂文に対応する通常の例
における束縛代名詞の解釈である。(35)において「そこ」が束縛代名詞
として解釈される場合、「トヨタ以外の会社A、B、Cがあるとき、Aは
Aを敵視している会社を訴え、BはBを敵視している会社を訴え、CはC
を敵視している会社を訴え、(そうすることが最も予期されがたい)トヨ
タさえもトヨタを敵視している会社を訴えた」という意味になる。これ
は「トヨタ以外の会社A、B、Cがあるとき、A、B、Cともにトヨタを敵
視している会社を訴え、トヨタさえもトヨタを敵視している会社を訴え
た」という代名詞が同一指示の解釈をうける読みとは異なるものである。
Reinhart (1983)等によって観察されているように束縛代名詞の解釈を可
能にするには、表層構造において当該代名詞がその先行詞(数量詞や焦
点を担う要素)によってc統御されるという条件を満たさなければならない。
もし、(36)の例が基底生成され、何の移動過程も含まないものと
仮定すると、先行詞の「トヨタさえ」は束縛代名詞「そこ」をc統御できず、
意図した解釈は得られないことを予測する。一方、もし、「e」で示され

た空所の位置から何らかの空の演算子が節の充分高い位置まで移動し、焦点位置に生ずる要素との適正な連鎖関係を形成すると仮定すると、束縛代名詞の解釈が可能であることが、第2節の(8)で観察した英語の再帰代名詞の解釈が(擬似)分裂文において可能であったのと並行的に説明できる。

焦点要素が格助詞/後置詞を伴わない(36)のような例において、束縛代名詞の解釈が得づらいのも、この場合派生に移動過程が含まれないと分析すると、束縛代名詞としての認可条件を満たす構造が形成されないため、非文法文になるという説明が可能になる。⁶

(37) a. ?*[_a [トヨタさえ]_iが e 訴えたの]は [そこ_iを 敵視している会社]だ

b. *[_a e [そこ_iを 敵視している会社]を訴えたの]は [[トヨタさえ]_i]だ

「そこ」が束縛代名詞として解釈されるような連結性は、焦点要素が格助詞/後置詞を伴う場合とそうでない場合とで、移動の関与の有無を裏付けるものであったが、英語でしばしば連結性を示すとされる要素に関して、対応する日本語の要素は(擬似)分裂文において必ずしも連結性を示さない。以下では、それらの要素に関して事実を確認していく。

まず、英語の再帰代名詞を含む(8)の例と並行的な例を考えてみる。

(38) a. ビル_iが自分_iの親を批判した

b. *自分_iの親がビル_iを批判した

(39) a. [ビル_iが批判したの]は自分_iの親(を)だ

b. [自分_iの親を批判したの]はビル_i(が)だ

(38)の対比で示されているように照応詞(anaphor)の「自分」は主語指向性を持ち、それをc統御する主語だけが先行詞となりうる。もし、(39a)で焦点要素が基底生成されるならば、その位置に生じている照応詞はその先行詞によってc統御されえず、解釈不能となるはずである。にもかかわらず、(39a)では照応詞の連結性が格助詞/後置詞の有無に関わらず成立しているようにみえる。もし、格助詞/後置詞を伴わない(擬似)分裂文が移動を含まず、それでもなお連結性らしき現象を示すのであれば、その解釈が可能になるのは移動過程を含むゆえではないことになる。むしろ通常先行詞によるc統御を「自分」が表層でその条件を満たしていないにもかかわらず解釈可能になるという事実が示唆するのは、繫辞を含む構文に特有の何らかのメカニズムが働いているという可能性である。

同様の特異性が不定名詞句の解釈にも見られる。まず、不定名詞句の生じる環境と解釈から観察すると、(40b)において不定名詞句のunicornが特定の指示対象を外界に持つのに対して(40a)のunicornは特定の指示対象持つ必要はない。このような不特定の解釈が不定名詞句に関して可能になるのは、それが内包的動詞(intensional verb)の領域内にある場合であるとされている。(40c)では、unicornが内包的動詞wantの領域外である主語の位置に生じているために、不特定の解釈はできない。

- (40) a. Mary wants a unicorn.
b. Mary is holding a unicorn.
c. A unicorn wants a cookie.

(41) It is a unicorn that Mary wants. (Halvorsen 1978)

(41)では表層でunicornが内包動詞の領域外にあるにもかかわらず、あたかももとの領域内にあるかのような不特定の解釈が可能である。

この不定名詞句の解釈に関する連結性に関しても、日本語は並行的な振る舞いをする。まず、(42b)で「ユニコーン」は特定の指示対象を持つ のに対して、(42a)では内包動詞の領域内にあるため、不特定の解釈が 可能である。その領域外にある場合には(42c)のように特定の解釈が 要求される。(42a)に対応する(擬似)分裂文(43)では「ユニコーン」は表 層では内包動詞の領域外にあるにもかかわらず、不特定の解釈が可能で あり、連結性を示している。

- (42) a. メアリーがユニコーンを欲しがっている
b. メアリーがユニコーンを抱いている
c. ユニコーンがクッキーを欲しがっている
- (43) メアリーが欲しがっているのはユニコーン(を)だ

ここで注意しなければならないのは、(43)では焦点要素が格助詞/後置 詞を伴わない場合でも不特定の解釈が可能だという点である。もし、格 助詞/後置詞を伴わない(擬似)分裂文の派生が移動を含まないものだと するなら、(43)で観察される連結性は移動過程ゆえに保障されるもので はなく、再び繫辞を伴う構文に特有の何らかのメカニズムに求められる べきと言えそうである。

次に観察する現象は上の二つと異なり、連結性があることが期待され るにもかかわらず、それが存在しない例である。まずは否定極性項目 (NPI: Negative Polarity Item)の認可に関する英語の例をみてみよう。

- (44) a. John hasn't left yet/*already.
b. [What John hasn't done] is leave yet/*already. (Halvorsen 1978)

yetは否定(辞)の領域において認可される否定極性項目であり、(44b)で

は表層において否定辞notにc統御される位置に生じていないにもかかわらず、文法文となっている。あたかも対応する(44a)のもとの位置で認可を受けているかにも見え、連結性を示している。

これに対応する例を日本語の否定極性項目を用いて検討してみると、(45)の「-しか～ない」の場合も(46)の「一つも～ない」の場合も否定極性項目は(擬似)分裂文の焦点位置では認可されえない。

- (45) a. ビルはメアリーしか*批判した/批判しなかった
b. *[ビルが批判した/批判しなかったの]はメアリーしかだ
- (46) a. ビルはりんごを一つも*食べた/食べなかった
b. *[ビルが食べた/食べなかったの]はりんごを一つもだ
- (47) a. ジョンは[ビルがメアリーしか批判しなかった]と思っている
b. メアリーしかジョンは[ビルが e 批判しなかった]と思っている
- (48) a. ジョンは[ビルがりんごを一つも食べなかった]と思っている
b. りんごを一つも ジョンは[ビルが e 食べなかった]と思っている

もし、焦点要素が格助詞/後置詞を伴う(擬似)分裂文が移動過程を含むもので、その派生過程が否定極性項目を焦点化する場合にも利用可能だとするならば、当然、否定極性項目がかき混ぜ操作(scrambling)によって文頭に移動を受けている(47b)(48b)の例と同様、(45b)や(46b)の否定極性項目も非焦点部分に含まれている否定辞によって認可されうることが予測される。にもかかわらず、(45b)(46b)が非文法文となることは(擬似)分裂文の派生に移動過程が含まれるという分析に疑問を投げかけるものである。

以上の議論をまとめると、移動過程が含まれることの帰結として連結性を示すことが予測される要素のうち、予測どおりの振る舞いを示したのは「そこ」に代表される束縛代名詞の解釈のみであり、照応詞の「自分」

および不定名詞句の不特定の解釈に関しては、予測される範囲外の環境でも文法的な例がみられ、否定極性項目の認可に関しては、予測される連結性が認められず、非文法性を示すことが観察されることを明らかにした。これらの事実から、日本語においては束縛代名詞の認可のみが移動による連結性の有無を試す基準となるという判断を導くことも可能ではある。が、もう一つの可能性として、焦点要素が格助詞/後置詞を伴う場合とそうでない場合とで派生の過程が異なり、その違いが束縛代名詞の解釈に関する事実を説明し得るのであれば、前者が移動過程を含み、後者は含まないという区別をする必要はない、という可能性がある。次節では、この可能性を議論する。

3.4. 連結性と削除分析との整合性

ここで思い起こすべきなのは、第2節で検討した、英語の(擬似)分裂文に見られる連結性(connectivity)は、他の要因を考慮しなければ、移動分析を想定しても、削除分析を想定しても、説明することが可能だということである。非焦点部分の節内で空の演算子の移動があり、空所と演算子さらに焦点位置の要素が同一指標を持つことで、連鎖束縛が可能になり、束縛代名詞の解釈が得られる、と考える代わりに、焦点の位置には焦点要素だけが基底生成されるのではなく、(擬似)分裂文に対応する通常の構造が繫辞の前の位置に生成され、焦点要素のみが音形を持って具現し、それ以外の要素は表層では削除される。しかし、削除された要素は音形を持たないだけで、構造上、削除を受ける前の情報をそのまま保持しており、束縛代名詞の認可条件を満たし得る(ミニマリストプログラムの用語を用いるならば、削除が適応されるのはスバルアウト後、PFへ送られた情報および構造に対してであり、LFへ送られる構造には何も影響しない、ということになる)。

- (35) [トヨタさえ]_iが[そこ_iを敵視している会社]を訴えた
- (36) a. [_a [トヨタさえ]_iが e 訴えたの]は [そこ_iを敵視している会社を]だ
- b. [_a e [そこ_iを敵視している会社]を訴えたの]は [[トヨタさえ]_iが]だ

このように考えると、束縛代名詞の解釈が可能なのは、特に連鎖束縛が成立しているという理由によるのではなく、(35)において束縛代名詞の解釈が可能なのと全く同じように、(36a)の束縛代名詞も認可されることになる。つまり、束縛代名詞の解釈が(36a)のように可能であるという事実自体は、その派生に英語と同様の(4a)のような移動過程が含まれることの決定的証拠にはならないのである。

(4) 非焦点(前提) 焦点

[_a ... -no]-wa XP-(Case Particle/Postposition)-da

- a. OP移動含む : 基底生成
- b. OP移動含む : 削除により派生b
- c. OP移動含まない: 基底生成
- d. OP移動含まない: 削除により派生

それでは、第3節の(14)でみた複合名詞句内から移動が生じているように見える例で文法性が極端に悪くなる事実は、日本語において、焦点要素が格助詞/後置詞を伴う(擬似)分裂文の生成の際に移動過程が含まれると分析する以外の見方はできないのだろうか? 次節では、ここでもやはり削除分析を採用した上での説明を考える可能性があることを示唆する。

4. 削除によって焦点要素を導く

第3節で観察した、日本語の(擬似)分裂文の生成が移動過程に対する制約である複合名詞句制約に従うようにみえるという(14b)の事実は、英語のデータとの並行性から、移動分析を示唆する強い証拠であるかに見える。しかし、(49)-(51)のような例を考慮に入れると、データの捉え方を再検討することが妥当に思われてくる。

- (49) a. [_a ジョンが [_Sメアリーが昨日 e その書類を見せた]と]思っているのは [あのCIAエージェントに]だ。
b. ?[_a ジョンが [_Sメアリーが昨日 e その書類を見せた]と]思っているのは [[あのCIAエージェントに]と]だ。
c. [_a ジョンが [_Sメアリーが昨日 e その書類を見せた]と]思っているのは [[あのCIAエージェントに見せた]と]だ。
d. [_a ジョンが [_Sメアリーが昨日 e その書類を見せた]と]思っているのは [[あのCIAエージェントにと]思っているのだ。
e. [_a ジョンが [_Sメアリーが昨日 e その書類を見せた]と]思っているのは [[あのCIAエージェントに 見せた]と]思っているのだ。

一般に削除が適用される環境では、同一の解釈が可能な、削除が適用されない表現も許容される。つまり削除の適用は随意的なわけである。(49a)で繫辞の前に音形を伴って生起しているのは[あのCIAエージェントに]で、これは非焦点部分の[_a]内で空所になっている部分に対応する情報である。(49a)ではたまたま[_a]内の空所と繫辞の前に生じている焦点要素が範疇的にも一致しているが、(49b-e)では、この一致が必然的なものではないことがわかる。(49b)では焦点要素に加え埋め込み節を導入する「と」(補文標識とらえるか後置詞と捉えるかは議論に影響しないため、ここでは問題にしない)が繫辞の前に生じている。ここで

は、埋め込み節とその上の節の動詞要素の音形が表層に具現していないのである。(49c)と(49d)では二つの動詞要素のうち一方が音形を伴って具現している。(49e)では焦点要素と動詞要素が両方具現している。

(49b)-(49e)の例から言えることは、焦点要素を含むより大きな構成素が繫辞の前の位置に生起しようということ、その構成素のうちの一部が音声的に具現しない例が許されること、(49b)に見られるように音声的に具現しない部分(つまり削除をうけた部分)が必ずしも一つの構成素を為すとは限らないこと、である。

さらに複合名詞句制約に抵触していると考えられてきた(14b)(=50a)の例を基に、(49)と同様の例を考えてみると、(50b)-(50d)のようになる。

- (50) a. *?[_a ジョンが [NP [s e e 会ったことがある]日本人]を大勢知
っているのは [ラッセルに]だ
b. *?[_a ジョンが [NP [s e e 会ったことがある]日本人]を大勢知
っているのは[ラッセルに会ったの]だ
c. [_a ジョンが [NP [s e e 会ったことがある]日本人]を大勢知っ
ているのは [[ラッセルに会ったことがある]日本人を]だ
d. [_a ジョンが [NP [s e e 会ったことがある]日本人]を大勢知っ
ているのは [[[ラッセルに会ったことがある]日本人]を大勢知っ
ているの]だ

(50b)では、繫辞の前に焦点要素を含む関係節が主要部なしで生じており、非文法文である。(50c)のように主要部の名詞要素まで音形を伴って具現すると文法文となる。(50d)のようにさらに上部の構造まで音形を伴って具現することもできる。このような例を観察すると、むしろ検討すべきなのは、完全な文から焦点要素めがけてどんな要素を削除して

いけるか、という問いのように思われる。

さらにこの見方を推し進める証拠として、一見wh島制約に抵触しているかに見える例がある。(51a)では、繫辞の前に生起している焦点要素に対応する空所[e]が[あのCIAエージェントに]に対応している解釈は得られない。これと対照的なのが(51b)で、焦点要素にさらに疑問節を導入する[か]が付属した形が繫辞の前に現れており、文法的である。(49b)と同様、二つの動詞要素とも音形を伴って表層に具現していない点特徴的である。(49c)-(49e)では、(49b)で欠けている二つの動詞要素の一方もしくは両方が音形を伴って具現しており、いずれも文法的である。

- (51) a. *_a ジョンが [_Sメアリーが昨日 e その書類を見せたか]調べているのは [あのCIAエージェントに]だ
 b. [_a ジョンが [_Sメアリーが昨日 e その書類を見せたか]調べているのは [[あのCIAエージェントに]か]だ
 c. [_a ジョンが [_Sメアリーが昨日 e その書類を見せたか]調べているのは [あのCIAエージェントに見せたか]だ
 d. [_a ジョンが [_Sメアリーが昨日 e その書類を見せたか]調べているのは [[あのCIAエージェントにか]調べているの]だ
 e. [_a ジョンが [_Sメアリーが昨日 e その書類を見せたか]調べているのは [[あのCIAエージェントに見せたか]調べているの]だ

もちろん、[_a]内の空所に対応する要素以外の要素が繫辞の前の焦点の位置に生じているような例は(擬似)分裂文とは独立の全く異なる構文と考える可能性がないわけではない。しかし、そのような独立の構文を派生するためには削除の操作が必要であり、その操作が利用可能であるならば、当然、その操作を適用して、従来から(擬似)分裂文として扱わ

れてきた例を派生すること可能性が残されることになる。

本論文では、焦点位置の要素に削除を適用して従来の(擬似)分裂文を派生する場合と、焦点位置に生ずる要素を基底生成し、非焦点部分に演算子の移動を適用して派生する場合とで、どちらか一つ選択することを可能にするような決定的な議論は、残念ながら提示できない。しかし、(擬似)分裂文の生成に移動が関与しないことを示唆する状況証拠はいくつかある。

Murasugi (1991)では(52b)や(53b)のように主要部に名詞修飾節内の付加詞に対応する「理由」「方法」などが生じた場合、長距離依存関係が許されない事実を、これらの名詞修飾節内で想定される付加詞の移動後に残される空所を適正に先行詞統率することを可能にする機能範疇が存在しないためと考えることで説明した。

- (52) a. [メアリーが去年会社を辞めた]理由を私は知らない
b. *[ジョンが[メアリーが去年会社を辞めたと]思っている]理由を私は知らない
- (53) a. [メアリーが去年北海道に行った]方法を私は知らない
b. ?*[ジョンが[メアリーが去年北海道に行ったと]思っている]方法を私は知らない

(擬似)分裂文で対応する例を考えると、全く並行的にこれらの付加詞が焦点位置に生じるような長距離依存関係は許容できない。

- (54) a. [メアリーが去年会社を辞めたの]は健康を害したからだ
b. *[ジョンが[メアリーが去年会社を辞めたと]思っているの]は健康を害したからだ
- (55) a. [メアリーが去年北海道に行ったの]は電車を乗り継いでだ

- b. *[ジョンが[メアリーが去年北海道に行ったと]思っているの]は
電車を乗り継いでだ

もし名詞修飾節に関して長距離依存関係が許されないことが、先行詞統率を可能にする機能範疇の欠落ひいては移動過程の欠落によって説明されるのならば、(擬似)分裂文における並行的な例も同様に空の演算子の欠落および移動過程の欠落によって説明することが妥当であると思われる。

また、日本語では英語と異なり、(擬似)分裂文の焦点位置に生ずる要素が複数ある(56)のような例が存在する。

- (56) [_a ジョンが e e あげたの]は [メアリーに][りんごを三つ]だ

もちろん空の演算子が多重にチェックされる過程を想定したり、あるいは Koizumi (1995) や Kuwabara (1996) のように空の演算子 OP は名詞句に対応しているのではなく、動詞が繰り上げ操作を受けた後の動詞句に対応する要素だと考えることで、焦点が一つ、素性のチェックも一度で行われるような分析を考えることも可能である。が、焦点部分に生ずる要素の数と組み合わせにかなりの自由度があることは、日本語において並行的な節の要素の削除が随意的に行い得ることと関連付けて説明するほうが妥当に思われる。

さらに、否定極性項目の認可に関して連結性が見られないのも、

- (45) b. *[ビルが批判した/批判しなかったの]はメアリーしかだ
c. [ビルが批判しなかったの]はメアリーしか批判しなかったのだ
(46) b. *[ビルが食べた/食べなかったの]はりんごを一つもだ
c. [ビルが食べなかったの]はりんごを一つも食べなかったのだ

(45c)や(46c)のように焦点部分に否定辞を含む動詞要素を補うと文法的になることから、移動に関連した連結性が見られないととらえるよりも、削除に関する何らかの制約に抵触していると考えerのほうが妥当であろう。

4. まとめ

前節までで議論したことをまとめると、日本語の(擬似)分裂文では焦点要素が格助詞/後置詞を伴うか否かで非焦点部分に移動過程が関与するかどうかの違いはなく、むしろ焦点要素が基底生成さえるか削除によって導かれるかの違いを持つ可能性を示した。格助詞/後置詞を伴う場合には(4d)の派生過程を持ち、伴わない場合は(4c)の派生過程を持つと分析することで、いままで見落とされてきたデータを包括的にとらえる可能性が生ずることを示唆した。

(4) 非焦点(前提) 焦点

[_a ... -no]-wa XP-(Case Particle/Postposition)-da

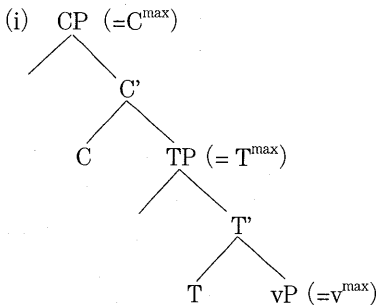
- a. OP移動含む : 基底生成
- b. OP移動含む : 削除により派生
- c. OP移動含まない: 基底生成
- d. OP移動含まない: 削除により派生

統語的な移動過程が関与することが強く意識されていた、日本語の格助詞/後置詞を伴う(擬似)分裂文を削除によって派生するほうが妥当であることになれば、焦点化という機能をもつ構文を派生するために言語によって利用する手段が異なることになる。もちろん、本論文で明示できなかった削除のメカニズムを解明するとともに、どんな要因が移動もしくは削除を誘発・認可するのか、それぞれの言語の持つ他の特性と関連

付けて説明する必要があることは言うまでもない。現在考えられるのは、日本語に空の演算子を認可するような特性を持つ機能範疇がないことにより、日本語では移動は焦点化を含む様々な機能を果たすための操作として利用することはできず、その代替操作として、削除操作を可能な限り利用しているということが出来るかもしれない。このような説明が無理なく幅広いデータを説明することができれば、言語の多様性に関して、Fukui (1986, 1988, 1995)で提案された、機能範疇のみがパラメータ化されうるとする仮説に新たな証拠を付け加えることになるであろう。

注)

1 (6)および(7)では以下の議論に大きく影響することがないとの判断から、SやAUXの範疇および三叉枝分かれの構造を修正せずそのまま表記したが、本論文で基本的に採用しているのは(i)で示したChomsky (1995)で想定されている二叉枝分かれの句構造である。



2 複合名詞句制約、wh島制約は以下のとおりである。

(i) 複合名詞句制約

No element contained in an S dominated by an NP with a lexical head

noun may be moved out of that NP by a transformation. (Ross 1967)

(ii) wh 島制約

An NP that is part of an indirect question cannot be questioned or relativized.

複合名詞句制約では語彙主部を持った名詞句に支配されたSの内部から要素を移動させることができないこと、wh 島制約では間接疑問文内の名詞句を疑問化あるいは関係詞化(つまり移動)できないことを記述している。

3 擬似分裂文では[_a]全体が外界に指示対象を持つような名詞的要素に転換される過程が含まれる可能性があるが、ここでは論じない。

4 焦点要素が格助詞/後置詞を伴う例に関しては、特に格助詞が生起する場合の文法性の判断に関して個人差が大きく見られる。著者の判断はHojiの判断と同様であり、格助詞/後置詞を伴う例を基本的に文法的であるとして議論を進める。

5 Halvorsenが指摘するように網羅的であることの含意に関してはより精緻な記述が必要であるが、ここでは論じない。

6 「そこ」がトヨタを指す同一指示(coreference)の読みは許容される。

参考文献

- Akmajian, A. 1970. Some aspects of the grammar of focus in English. Doctoral dissertation. MIT.
- Barss, Andrew. 1986. Chain and anaphoric dependence: On reconstruction and its implications. Doctoral dissertation. MIT.
- Chomsky, Noam. 1977. On wh-movement. In P. W. Culicover, T. Wasow, and A. Akmajian (eds.) *Formal syntax*, 71-155.
- Chomsky, Noam. 1995. *The minimalist program*. MIT Press.
- Fukui, Naoki. 1986. A theory of category projection and its application. Doctoral dissertation. MIT. [Revised version published in 1995 as *Theory of projection in syntax*. CSLI Publication.
- Fukui, Naoki. 1988. Deriving the differences between English and Japanese: A case study in parametric syntax. *English Linguistics* 5, 249-270.
- Fukui, Noki. 1995. The principles-and-parameters approach: A comparative syntax of English and Japanese. In M. Shibatani and T. Bynon (eds.) *Approaches to language typology*. Clarendon Press.
- Halvorsen, Per-Kristian. 1978. The syntax and semantics of cleft constructions. Doctoral dissertation. University of Texas at Austin.
- Higgins, Francis Roger. 1973. The pseudo-cleft construction in English. Doctoral dissertation. MIT.
- Hoji, Hajime. 1985. Logical form constraints and configurational structures in Japanese. Doctoral dissertation. University of Washington.
- Hoji, Hajime. 1990. Theory of anaphora and aspects of Japanese syntax.

- Ms. University of Southern California.
- Hoji, Hajime and Ayumi Ueyama. 1998. Resumption in Japanese. Ms. University of Southern California.
- Koizumi, M. 1995. Phrase structure in minimalist syntax. Doctoral dissertation. MIT.
- Kuno, Susumu. 1973. *The Structure of the Japanese language*. MIT Press.
- Kuwabara, Kazuki. 1996. Multiple wh-phrases in elliptical clauses and some aspects of clefts with multiple foci. In M. Koizumi, M. Oishi and U. Sauerland (eds.) *Formal approaches to Japanese linguistics 2*. MITWP 29.
- Murasugi, Keiko. 1991. Noun phrases in Japanese and English: A study in syntax, learnability and acquisition. Doctoral dissertation. University of Connecticut.
- Peters, S. and E. Back. 1971. Pseudo-clefts sentences. In *Report to NSF: On the Theory of Transformational Grammar*. GS-2468. Department of Linguistics, University of Texas at Austin.
- Pinkham, J. and J. Hankamer. 1975. Deep and shallow clefts. *Papers from the 11th Regional Meeting*. Chicago Linguistic Society, Chicago. 429-450.
- Reinhart, T. 1983. *Anaphora and semantic interpretation*. The University of Chicago.
- Ross, John Robert. 1967. Constraints on variables in syntax. Doctoral dissertation. MIT.
- Saito, Mamoru. 1985. Some asymmetries in Japanese and their theoretical implications. Doctoral dissertation. MIT.